ジャンボ！　ぼく　本当はね・・・
ほんとう
～児童労働問題～
じどうろうどうもんだい
作 / 絵：すずき　ふうか

「あしたから学校に来なくていいよ！」って、言ったらみんなは どう思う？

「やった～！！」

「なんで？ラッキー！」と 子どもたちは、よろこびました。

「ほんとに？先生と会えなくなるぞ～！」と先生は、笑いながら言いました。

先生は、「この世界には、学校に行けない 子どもが、たくさんいるんだよ。」と、アフリカの国の子どものことを教えてくれました。

学校からの帰り道、マリアは、先生の話がとても気になりました。

「あっ！いった～い！！！」

足元を見ると青く光っている石を見つけました。

「あれ？　こんなところに、こんなものあったかな？」と、ふしぎに思ってのぞきこむと・・・

クルン☆彡　と何かが飛び出してきました。

「妖精さん！？」

びっくりしていると、妖精さんは、マリアに声をかけました。

「こんにちは！どうしたの？
なんだか、悩んでいるみたいだけど・・・」

マリアは、先生に、アフリカには学校に行けない子がいることを教えてもらったと話ました。

「そんな子、いるとおもう？」

「じゃあ、行ってみようよ！・・・ ☆彡」

「えっ？　わぁぁぁ～☆彡」

「えっ？　ここ、どこ？　あれ？　妖精さんは？
なんだか、すっごく暑いんですけど・・・」
すると、とつぜん、男の子が声をかけてきました。

「ジャンボ！
こんにちは！
君どこから来たの？」

「ジャンボ？」
マリアは、木に隠れてモジモジしていると・・・

「ぼく、ムファサ。よろしくね。ここは、アフリカだよ。」と、
にっこり笑って、びっくりしているマリアに手を振りました。

ホッとしたマリアも、ごあいさつ！
「こんにちは。わたし、マリア、よろしくね。」

「ねぇ、ムファサくん。なんでこの家、誰もいないの？」と、
マリアが聞くと、

ムファサは、「大人も子どもも、みんな、はたらいているんだ。ぼくも
これから、みんなのところに行かなくちゃ・・・。今、水くみから、
かえってきたところなんだ」と、教えてくれました。

「ねぇ、学校は？　ムファサくんは学校には、行かないの？」

「学校？・・・行ってみたいな。でも、ぼくには、やらないと
いけない仕事が、いっぱいあるんだよ・・・。」と寂しそうに
ムファサはいいました。

「・・・。」
マリアは、学校に行けることが普通のことではない ことを
知りました。

「ムファサー、まだー！ちょっと手伝ってー。」

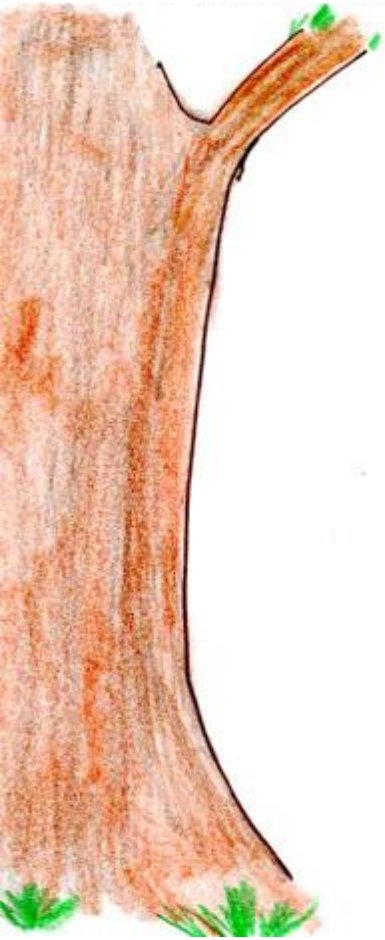
「あっ!　みんなが呼んでる。

　ごめんね。ぼく、もう いかなくっちゃ。」

といって、ムファサは仕事に出かけていきました。

「あっ、行っちゃった・・・」と、マリアがムファサくんの背中を

ながめていると・・・



「あー、ここにいた！ごめんね。マリアちゃん」と、

妖精さんが現れました。

「どこに行ってたの？」

マリアは、男の子と友達になったことや、でも、その子は、すぐに

仕事に出かけてしまったことなどを、妖精さんに話しました。

妖精さんは、

「ねえ、これみて、マリアちゃん。

今、アフリカの子どもの1日の仕事の 写真 を撮ってきたの。

こんなにたくさんの仕事があるんだね」

10km＝グランド25周
8kg＝500mLペットボトル16本

これじゃ、学校に行く時間なんてないね・・・と、マリアは言いました。

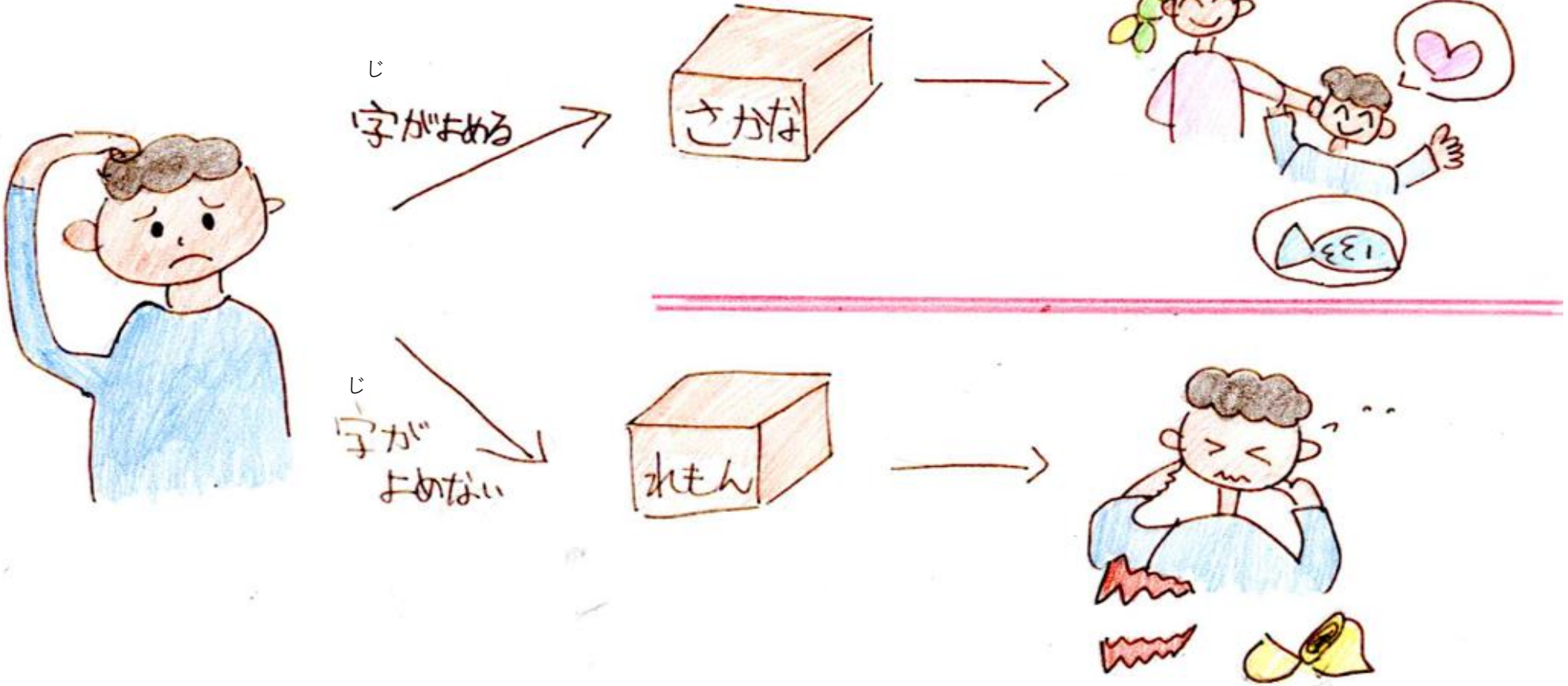
妖精さんは、
「家が貧しくて働かなくてはいけない。
学校 や 教える先生がいない。
女の子は 勉強 しなくてもいいと思っている。
戦争がおきている。 などが学校に行くことが
できない 大きな理由になっているんだって・・・。」
と、教えてくれました。
大人になって必要なことを教えてもらえるのに・・・。
学校の楽しさを知らないなんて・・・。マリアは悲しくなりました。

妖精さんは、さらにつづけました。

「マリアちゃんは、学校で読み書きや足し算や引き算など、教えてもらったでしょ？

それができなかったら、どうなると思う？

文字が読めなかったら・・・



計算(けいさん)ができなかったら・・・？

読(よ)み書(か)きや計算(けいさん)は、生活(せいかつ)するのに とっても大事(だいじ)なことなんだよ。

それができないと、大人(おとな)になってから できる仕事(しごと)が限(かぎ)られちゃうよね。

ということは、今(いま)までと変(か)わらない生活(せいかつ)がずっと続(つづ)いちゃうことになるんだよ。

「マリアちゃーん。まってー。
あのね。今日は マリアちゃんと遊んできていいよ。って言ってくれたの！」と、ムファサは走ってきました。
「ねえ、ぼくね、行きたいところがあるんだ。一緒に 行こうよ！
子どもたちが、集まっているところなんだけどね。
みんな楽しそうなんだ☆彡」と、目を 輝かせていいました。

くん、くん・・・

「マリアちゃん、なんだかとっても、いい匂いしない？」

「うん。何のにおいだろう？おなかすいちゃったね、ムファサくん。」

「あっ、これ、ぼくの好きな“パーラ“っていうアフリカの食べ物だよ。

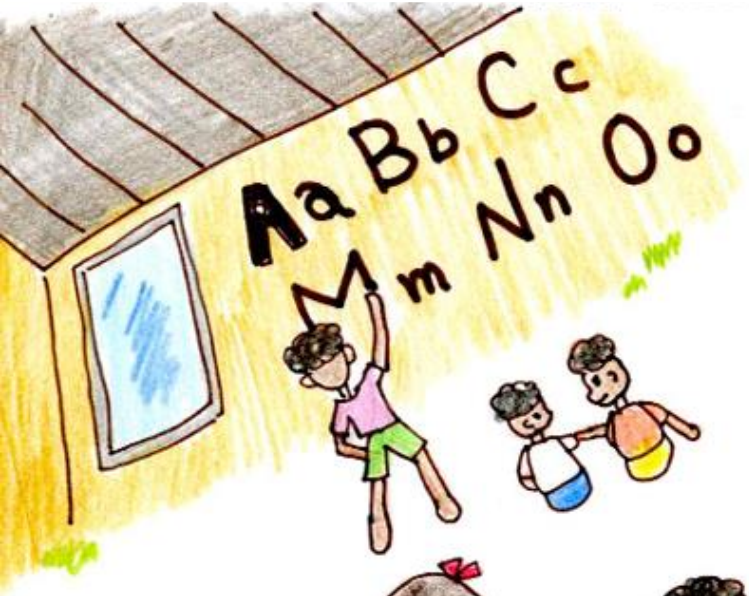
トウモロコシと大豆の粉でつくった　おかゆみたいなものなんだよ。」

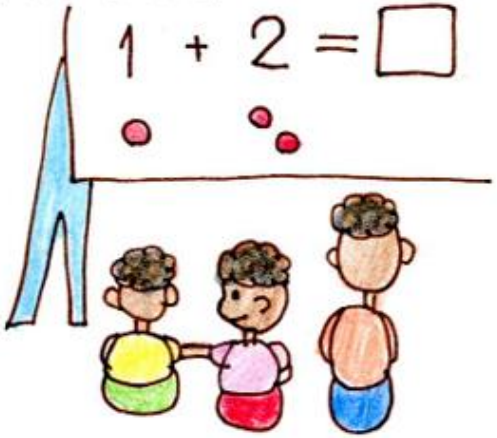
「へぇ、おいしそう。あそこで配ってるみたいだよ。

ムファサくん、行ってみようよ。」

「ところで・・・マリアちゃん、ここどこだろうね。みんな楽しそうだね。」

「ジャンボ！こんにちは。新しいお友達だね。ようこそ！ここは、学校。そして、ぼくは先生だよ。
お友達と 遊んだり、いろんな年の子ども達が、足し算や引き算、文字の読み書きなどを先生から教えてもらえるところだよ。
それにね･･･、給食 も 食べることができるんだよ。」と、やさしく声をかけてくれた人がいました。





その先生は、「少し、見学していかない？」と、ムファサに言いました。
そして、ムファサという自分の名前の書き方を教えてくれました。
それから･･･、おいしい 給食 も 食べました。
ムファサは、楽しい時間を過ごしました。
そろそろ帰る時間になりました。
2人は、先生にお礼をいい学校 を 後にしました。

帰り道、ムファサはマリアに言いました。

ぼく、家に帰ったら、

「学校に行かせて！今日、自分の名前が書けるようになったんだよ！

ぼくね、大きくなったら、やりたいこと みつけたんだ！」

って言うよ。

マリアは、ムファサの言葉を聞いて、とてもうれしくなりました。

そして、「応援してるよ！」といい、お別れをしました。

妖精さんは、コーヒーやチョコレートを食べるとき、ムファサくんのこと思い出してね！と、マリアに言って、
青い空　高く 飛んでいきました。

ねえ・・・。きみなら、ムファサくんのように学校にいけないお友達に 何をしてあげたら良いと思う？

Aa Bb
Mn Nn